

北方のフランス語文学——定項と収束

Les littératures francophones septentrionales : constantes et convergences

Jean-Marie Klinkenberg

三田 順 (訳)

I. フランス語文学：中央集権システム

1. 中央と周縁

世界的に見ると、文化——より正確に言えば文学——は複数の大きな集団によって生産されている。この集団は多くの場合同じ言語を使用しているが、同じ国である必要はない。例えば英語文学はアイルランドやカナダ、イギリス、あるいはアメリカで書かれた文学を含んでいる。また、オーストリア、スイスで書かれたドイツ語文学も存在する。これらの集団はそれぞれ異なる規則を有しているため、様々なシステムを作り上げている。

フランスという集団の基本原理は中央集権化であろう。アメリカ文化の場合、どこに中心があるかを問うても意味はない（映画の中心地はハリウッド、演劇であればニューヨークのブロードウェイ）。しかしフランスの場合、中心とは当然ながらパリである。パリには文化的、知的な業界を統べる諸機関のほぼ全てが集まっている。

とはいえ、パリという街全体が中心なのかと言えばそうではない。出版社や文学カフェといった機関は、セーヌ河左岸の僅か数百メートル四方の一角に集中しているのである。この中央集権化の伝統は実に古くから存在し、政治的あるいは言語的な形を取って社会の様々な場で機能している。

この中央集権化によって当然ある結果が生じる。すなわち、パリ以外の文学や文化に周縁的な性格が与えられるのである。

これら周縁の文学が中央に対して有する関係を説明するに当たって、太陽系の構造を比喻として用いることができる。各天体はそれぞれ中央に位置する太陽の周囲で軌道を描き、太陽の引力故にこの軌道から外れることはない。同様に、周縁の文学の軌道は中央の文学との間で育まれた関係に従属している。つまり周縁の文学は（彼らを中央へ引き寄せる）向心力を受ける一方で、（彼らを中央から遠ざける）遠心力をも受けるのである。

歴史を通じてこれらの力は変化してきた。向心力が勝ると中央の文学に無条件に同化し、遠心力が勝るなら中央の文学からほぼ完全に独立することになる。

このようにフランス語文学の集団は太陽系に似た関係として説明できる。影響を及ぼす種々の力は、中央であるパリの文学に対して各フランス語文学がどのような立場を取るのかによって変わってくる。従って、この関係性を考慮した上で各フランス語文学を分類することが重要となる。

2. 三つの同心円

このモデルを用いることで、各フランス語文学が有するパリからの地理的、制度的距離の度合いに応じてフランス語文学を以下の様に三つのカテゴリーに上手く分類することが可能となる。

(1) 「フランスに隣接しているフランス語文学」

ここにはベルギー文学とスイス・ロマンド文学が含まれる。これらの文学が発展した地域は元々フランス文化の形成過程に関与しており、「伝統的にフランス的文化の地」と呼び得る。

(2) 「地理的にフランスに隣接してはいないがフランス的伝統に属しているフランス語文学」

これらの文学はフランス人が本格的に入植した地域で発展した。アメリカのルイジアナ文学が消滅しつつある今日、このグループに含まれるのはカナダのアカディア文学、ケベック文学位しかない。

(3) 「主にフランスとベルギーによって植民地化された国々の文学」

これらの文学は、サハラ砂漠以南に位置するアフリカ文学と、マグレブ文学の二つの地域に大きく分けられる。今日のこれらの地域の言語や文化には、フランスの言語、文化の影響が明瞭に認められる。

以上三つのカテゴリーに属する各文学が収束現象を示しているならば、それは中央と同一の関係を維持してきたからであり、この三つのカテゴリーの文学間に直接的な接触があったためではない。

本講演の主題である「北方のフランス語文学」がこれらのグループのどこに位置付けられるかといえば、上で見た様にそれはまず、a) 伝統的にフランス的な文化圏で発展し、b) ずっと以前にフランスから政治的に独立している、フランス国外の文学である。

この文学としては、フランス語によるベルギー文学、スイス・ロマンド文学（上の区分の一つ目のカテゴリー）、そしてケベック文学（二つ目のカテゴリー）が挙げられる。

II. 五つの収束

以下では、これら三つの文学の収束という現象を考察して行く。収束という用語を使用するのは、「共通点」とは異なるためである。共通点とは、今取り上げている三つの文学に見出され得る完全に同一の性質だが、収束という語で寧ろ言わんとしているのは比較可能な大きな要因で、それは時として差異や特異性をも生じさせるものである。

この収束には全五種類ある。密接に結び付いた五つの収束は、これらの文学の歴史的な発展に由来するタイプ（一つ目と二つ目の収束）と、地理的な状況に由来するタイプ（三つ目と四つ目）に分けられる。五つ目の収束は横断的な性質のもので、先の四つの収束を要約するものである。

1. 発展の後進性

良く注意していないと、これらの文学が長く豊かな伝統を有していると考えてしまうかもしれない。後にベルギーとなる地域には、中世以降トルヴェールと呼ばれた吟遊詩人や年代記作家がおり、スイスからはジャン・カルヴァンやジャン・ジャック・ルソーが出ている。

とはいえ、これは過去に遡って歴史を再構築した結果である。これらの地域のフランス語文学が本当の意味で発展を遂げたのは19世紀中頃のことで、この時期に「ベルギー」や「スイスのフランス語圏」ないし「スイス・ロマンド」、あるいは「フランス系カナダ」といったまとまりが認められるようになってくる。

こうした文学が目に見える形になったことには政治状況が関わっている。これらの集団の文学的発展は、ほぼ同時期に生じた政治的な安定と不可分である。

——ベルギーは様々な国の支配を経て後、1831年に独立を達成する。

——スイス：小さな封建国家の集まりとしての「スイス連邦」は14世紀から存在するが、この「スイス連邦」はナポレオンによる征服によって1798年に消滅する。スイスは1815年に確固たる独立を回復するが、アメリカ合衆国の連邦制に倣った国家形態を真の意味で備えるようになったのは1848年のことである。

——ケベック：16世紀中頃からサンローラン河の周辺にフランス人が入植し始めたのが「ヌーベルフランス」の始まりであった。ヌーベルフランスは1763年に崩壊し、フランスはカナダにおける領土（と臣民）をイギリスに譲る。従って18世紀末以降のフランス系カナダ人の歴史とは、イギリスによる占領と社会経済的、文化的同化政策への絶えざる抵抗の歴史であった。最終的にカナダが1867年に連邦国家になるとケベックは自治地域として認められ、フランス語が英語と並んで公用語とされた。

三つのグループはそれぞれ1831年、1848年、1867年に遅ればせながら政治的な安定を獲得するが、このことが文学様式に二つの大きな影響をもたらした。

- (1) 一つ目は文学に限定された影響である。新しい政治形態において生まれたこれらの地域の文学には、「文学的母国」（ないし文学的起源）である同時代のフランスで展開した文学に比して美学的な後進性が認められる。例として、
——フランスにおいてロマン主義文学は1830年頃に展開する。
——ベルギー文学の端緒であり、ロマン主義を受け継いだシャルル・ド・コステールの『ユーレンスピーゲル伝説』

は 1867 年に書かれた。またケベックでは 1860 年代に、偉大なロマン主義詩人ルイ・フレシェットが代表作を発表している。

このように、これらの地域には文学的な発展において後進性が見受けられる一方、この遅れを取り戻そうとする試みも認められる。フランスで順次登場した様々な新しい美学は、これらの地域において同時期にまとめて受容される。例として、ベルギーの最初の重要な文芸誌——『若きベルギー』誌——は、1880 年頃に高踏派と自然主義という美学を共存させようとしたが、フランスにおいてこの二つの美学は明らかに別のものであった。

(2) 二つ目の影響はより広い意味で文化的な形で現れた。これら新しい政治的集団の民族主義的、国民主義的言説は、その存在を正当化する文学の発展に拠っており、ここから二つ目の収束が生じる。

2. 「国民文学」を巡る問題

ここで考察しているロマン主義の時代の特徴の一つに、誕生した国家の文化的な遺産を称揚し、その民族の独自性を主張するということがある。本稿で取り上げている三つの地域はドイツ・ロマン主義の影響を受け、各文化の特殊性の高度な表現として文学的営為を企図する。

従って、安定した政治的まとまりを「強固なものとする」ために、ベルギーやスイス、フランス系カナダの文学には国民性、民族性のレッテルがそれぞれ貼り付いている。この様な文脈で、「ベルギー精神」や「スイス主義」、あるいは「フランス系カナダ精神」といった、極めて良く似た概念が生まれてくる。

——「ベルギー精神」。19 世紀初頭、ベルギーで文学に使用される言語はフランス語のみであった。というのも、フランス語はブルジョワ階級の言語だったからである。よってベルギー文学はフランス文学に対してどのように違いを打ち出すかが問題となった。実際に人口の大部分が話していたのは、ヴラーンデレン（フランドル）語（ゲルマン系言語である大衆的なオランダ語）であったが、この言語の話者は当時ほとんど文学活動を行っていなかった。従って、ベルギー精神はラテン性とゲルマン性の混合物、すなわちゲルマン的な謎めいた心情と、フランス語という言語の明晰さを有するものとして定義されることになる。

それ故、この時期のベルギー文学の独自性は、フランス語を使用しながらもフランスからは離れようとする態度にある。具体的には特にドイツ・ロマン主義が特に尊ばれ、古いゲルマン文学の技法が取り入れられた。

——「スイス主義」とはスイスの風景の汚れなさや雄大さを称揚することにある。その独自の風景、文明から守られた無垢の自然、さらにはプロテスタントという宗教的背景も重要な役割を果たしている（概括すれば、登山とプロテスタント主義）。

——「フランス系カナダ精神」は、先祖伝来の古典的なフランス語表現の尊重とカトリック信仰、そしてカナダの大地における労働の賛美が組み合わさったものである（ケベック文学の端緒である小説『マリア・シャプドレーヌ』はこれらの要素を含む）。

定式化の方法や内容に差異は認められ得るものの、その構造は同じである。いずれのケースでも決まり文句が繰り返されて強固になり、そこに住む人々、そして彼らが生み出し、その文化の独自性を例証する文学作品の特徴とされるのである。

国民文学へのこの強迫観念は、当然のことながら、これらの文学の発展史の初期段階に認められる。

とはいえ、この傾向は後に消えてしまうわけではない。文学に国民性を求めるか否かは、これらの地域で問われ続け、作家達はこれに対してどのような態度を取るのかが問われる。フランスの作家は自分が「フランス文学」に属しているのかを問われることはない。彼らは「フランス文学」という概念を否定することも擁護することもないのである。

これに対して、ベルギー、スイス、ケベックの作家達は、20 世紀の末までベルギー性、スイス性、ケベック性を巡る二つの立場について態度を表明せねばならなかった。一方は、これらの文学をフランス文学に従属したもの（さ

らにはフランス文学に完全に同化したもの)と見なし、他方はこれらの文学の出現を認め、ひいては独立したものと考える立場である。

例えば、偉大な作家アンリ・ミショーはパリに住み、ベルギーとの関わりの痕跡を完全に消そうと望んだ。こうしてミショーは、「ベルギー文学」という概念に相対する立場に断固属している。

従って、これら三つの地域出身の作家を研究する上で、国民性、民族性を巡る問題は極めて重要な鍵であり続けている。

上では収束の二つの事例を見た。おおまかに言えば、この二つの収束はこれらの地域の歴史的な要因、すなわち、文学とその地域の政治史に関わっていた。以下で紹介する二つの収束は、より文学的な実践に関わるもので、これらの文学がフランスに対して周縁的、従属的な状況にあることに起因している。

この特殊な状況は必然的に執筆活動に影響を及ぼし、新たな二つの収束を引き起こす。その一つは文学ジャンル、もう一つは文体の選択というレベルで生じる。

3. 文学ジャンルを巡る問題

「文学ジャンル」という用語は、詩や小説、随筆といった大きな括りのために使用されるが、それだけではなく各ジャンル内での分類（幻想小説、推理小説、連載小説）にも使用される。また歌や漫画のような大衆的な文学ジャンルも存在する。

どのジャンルで執筆をするのかには意味がある。例えば、詩を書くということは文学的に最も本質的なジャンルに属することを意味する。

ベルギー、スイス、ケベックの作家達は、フランスにおいて権威ある文学ジャンルにはあまり進出しようとなし、傾向がある。つまり、審査基準が非常に厳しく、競争が激しいが故、客観的に成功のチャンスが少ないと考えられるジャンルである。周縁に位置する作家は、中央の文学がなおざりにし、かつ彼らが成功できそうなジャンルを戦略として好む。ベルギーにおける漫画や幻想小説がその一例で、現在ではフランスで人気のなくなった詩というジャンルも、ベルギーやケベックで依然好まれている。

4. 執筆言語を巡る問題

ベルギー、スイス、ケベックの周縁的、従属的状況は執筆言語にも及んでいる。

外国人はフランス語が難しい言語であることに直ぐに気付くが、フランス語はフランス語話者にとっても難解な言語である。フランス語話者とは、文法が異常肥大した言語と共に生まれ、自分の言ったことが文法的に正しいかどうかを生涯自問し続ける人々である。文法に対するこの不安感は、周縁地域出身で標準語の規範に困難を抱えている人ほど強く有している。その証拠として、フランス語の規範文法はこうした地域出身者によって作られている。『*Le Bon usage*』という有名なフランス語の文法書を記したベルギー人のモーリス・グレヴィスがその一例である。

周縁地域出身の人々は自分を過小評価することが極めて多い。実際、こうした地域出身の批評家や歴史家は同郷人の言葉遣いについて非常に厳しい見解を示すが、この傾向は作家間にも存在する。概括するとこれは文学作品において過剰訂正と補完という、二つの戦略という形で現れる。

「過剰訂正」とは、その名の通り言語の規範を過剰なまでに重んじる傾向で、フランスの古典的な作家以上に古典的な言葉遣いという形で現れる。とうに20世紀に入っているにも拘らず、18世紀を思わせるエレガントな言語を使用するようなベルギー人の作家がその好例として挙げられよう。

これと逆のもう一つの戦略は「補償 compensation」で、規範から逸脱した周縁地域の言葉遣いを誇張する傾向である。これによって規範的言語を敬っていないことを示し、言語的逸脱を他と区別するための識別標とする。「凝りすぎた文体」や「不規則」、あるいは「言語的気取り」、「言語的冒険主義」等と呼ばれる文体の本質はここにある。

この傾向は周縁的地域の文学作品の多くに認められる。ベルギーのド・コステールは古風な言語を使用し、1960年代のケベックでは、隠語と英語表現の混じった「ジュアル *joual*」と呼ばれる、ケベック特有の大衆的表現が文学作品で積極的に使用されているのを見ることができる。スイスに目を向けると、20世紀前半に地域主義的小説を執筆した作家ラミュズが、土地の言葉を用いつつ、標準フランス語では文法の乱れと見なされる要素を誇張している。

ベルギーの漫画『タンタン』はこれらの問題点を示す好例である。この作品に登場する二人のデュポンというキャ

ラクターは言語的不能を象徴している。さらにこの作品には本節で指摘した二つの態度、すなわち、主人公タンタンの言語的純粋主義、彼の仲間であるハドック船長の冒険主義が見受けられる。

5. 横断的収束：メタ言説実践の重要性

これら周縁的な文学の特徴として最後に挙げられるのは、自分達の文学自体について多くの言説を生み出す点である。当然のことながら、この言説は前書や宣言、伝記的な覚書、批評言説、文学史といった様々な形を取り得る。再びフランスの作家と比較するならば、彼らがフランス文学の状況を巡って議論することがあったとしても、そこで何がフランス文学の本質を成しているかについて議論されることはない。

収束の最後のタイプ——メタ言説実践の重要性——は、私の考えでは、他の四つのものとは異なるレベルに位置し、これまで紹介した四つの収束を要約する性質のものである。実際、これまで紹介した収束の差異に注意深くあるならば、周縁的な文学についての批評言説において、各収束が何らかの形で現れ得るということに気付くであろう。

従って以下では、メタ言説の実践という枠組においてこれらがどのように現れ得たのかを確認しつつ、手短に各収束を再検討する。

a) 発展の後進性

ベルギー、スイス、ケベックの文学がある程度しっかりとした姿を現し始めた時、「母国」、つまりフランスの文学は既に10世紀もの歴史を有していた。文学の発展が客観的に「遅れて」いたが故、自文学の長い伝統を復元することが周縁的な文学に関わった初期の人々にとっての問題となり、これらの文学が生まれた時期（19世紀中盤）以降、数多くの過去の作家、文学作品が、各国民文学に取り込まれることとなった。

この地域の初期の文学史家の意図は将にここにある。例えばスイス・フランス語圏でヴィルジル・ロセルのような人物が浩瀚な文学史を著しているが、この著書はスイス・ロマンド文学の歴史をローマ時代まで遡り、スイスの偉大な作家の中には当然のことながらカルヴァンやルソーが組み込まれている。

b) 国民文学を巡る問題

こうして、文学的メタ言説が入り込んだ議論では、スイスやベルギー、ケベックの「国民、民族文学」という概念を肯定、あるいは否定する表象を作り上げることで、文学作品における国民性の有無が問題となる。

例えば、20世紀初頭にフランス系カナダの民族的文学を支持した人々は、カナダ・フランス語文学の健全さという特質に相対する形で、フランス文学を道徳的に墮落し、美学的に品位の落ちたものと位置付けて行くが、これは中央のフランスから距離を取ることでこそ獲得される特質であった。

逆にベルギーの国民文学という概念に反対する人々は、フランス語が他のあらゆる基準に勝る重要な絆であり、ベルギー・フランス語文学はフランス語の大きな集団に結び付けられるべきだと主張する。

c) ジャンルを巡る問題

周縁の文学が中央で見捨てられているか、あまり評価されていない二次的な文芸ジャンルを好む傾向にあることは既に見た。

メタ言説は、(構造的な制約に起因する)文壇で高く評価されていないジャンルを選択することを弁護、正当化しようと試み、それらが地域の「気質」、すなわち、長い歴史を有する国民的、民族的伝統に固有の文学的本質にただ合致しているのだと思わせる。

例として、スイスのフランス語圏における道徳的文学の存在感の大きさは、カルヴァン以来の文学作品を特徴付ける「プロテスタントの系譜」への忠誠心として説明できる。

ベルギーの大衆的な文学ジャンルに見られる過剰な表現は、例えばヴラーンデレン（フランドル）文化の「露骨さ」や「大衆性」と結び付いている。また、幻想文学が好まれる傾向は、ベルギー精神の本質的な構成要素である「陰鬱さ」や北方性、神秘性と関連している。

d) 最後に挙げる執筆言語の特徴も多かれ少かれ同じメカニズムを有している。

メタ言説は、(言語的な劣等感に対抗するためのメカニズムである)「過剰訂正」と「補償」の間で選択された文体を、フランスの文学史で用いられる美学的分類に対抗し得る新しい美学として再公式化する。例として、ベルギーでは「不規則な言葉遣い」を使用する流れが目立ったが、これは「補償」という手法による文学生産の一タイプであり、ベルギーの文学を象徴する要素の一つである。

結論

ベルギー、スイス、ケベックという三つの文学グループを考察することで、文学という概念自体が大きく揺らいでくる。このアプローチによって、文学というものが単に美しい文章や記録の集積ではないということが明らかとなる。文学とは様々な規則を有するシステムであり、当然のことながら社会学の対象となる現象である。